



舞扇

北
修
誠

集英社

舞扇

一九七七年九月三十日 初版印刷
一九七七年十月二十日 初版発行

定価 一二〇〇円

著者 北條誠

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五一一〇

郵便番号

一〇一

出版部二三〇一六三六一

電話

販売部二三〇一六一七一

印刷所 大文堂印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本はお取替いたします

©1977 M. HÖJYŌ

0093-772108-3041

目

次

一
年

埴
輪と
鏡

春
服

舞
扇

ま
えが
き

二
四

八

四

二

五

寒
菊

一六七

曲
芸

一九三

稽
古
扇

二二五

あ
と
が
き

二五七

装
幀
巖
谷
純
介

まえがき

北條誠は演劇人として、演出家として大を
なし、その方面の仕事で五十八年の生涯を
埋めている。志を演劇の世界に置いた氏に
とつては満足なことであつたと思う。

しかし、北條誠は初めから演劇人として
スタートしたわけではない。戦前から戦後
にかけて、氏は若き小説家としての輝やか
しい時期を持つている。そしてその短い時期
に一群の短篇を生み出している。いま振り返
つてみると、氏独自の資質の閃きを見

せた珠玉の短篇と言つていいものはかりである。氏の急逝後、氏と親しかつた者たちが氏を語る時、必ず一度は出る話題であつた。ここに、友人知己相集つて、氏の若き日の作品を一冊に編んだ。「舞扇」一巻が、現下の昏迷する読書界に果す役割は極めて大きいと思う。

昭和五十二年九月

井

上

讀

舞

扇

舞

扇

昔の東海道の面影が、埃をかぶって残された松並木の旧道から、十二間の新国道へ、だら／＼上りの露次のように狭い坂の中途に「森伝」のくすんだ平屋がある。何十年來の事であった。

雨の日など、坂道はぬかるんでひどく出入に不自由であったが、そうすると「森伝」の半纏姿の若い鳶が、威勢よく水たまりをよけて真新しい筵を敷く。昔ながらの老舗で、変らず客足は多いのだから、良い加減どうにか思案あつて良さそうであつたが、その不便さがかえってびたりと型についていた。天気の日であれば、客の下駄音が店前の唐銅からかねの天水桶にカン／＼と響く。もうそうなれば丸に伝と染めたのれんや、波模様を刻んだ格子戸、平打の銅で締めた大扉やら、恐ろしいもので一分動かぬかんじである。坂にならつて心持かしいだ低く黒く分厚な軒さえ、古風の鉄燈籠をさげて構えた重みがあつて。先々代の頃も、又とりわけ先代の時は新国道が出来た折で、よい折だから移転、それが駄目ならせめて改築をと言う口は多かったが、聞かれなかった。商店は見てくれのものでなし、又商いと言えば軽々しい客あしらいの浮草心にひびくが、信仰であり歴史である。「森伝」はこの店がふりかざす名ではなくて、今日では客方が信じて下さる名である——と、かたくなと振り棄て切れぬ真理があつた。だから絶え間なく自動車の流れるまぶ

しい新国道からも、一寸折れゝばすべてがこの低い軒の下でそっくり一つの色に入る。娘の京子にしたところ、京浜電車浜川駅で下りれば、何時か慣れて、当然家の角にくるまでには能の小面のように古風の眼になった。ハイヒールの足が内股になる。——まことにのぼりつめた世界である。また良くしたもので、そうなると雨の日の不自由ささえ、かえって真新しい筵につける二ノ字／＼が客の側でも変にとぼけた魅力になった。

これを、時代に背を向けた小さな古い気質と言ってしまえばたちも無い。併し此処数十年、近隣一流の粹筋の台所には「森伝」の海苔は名指しで通っている。浅草の田丸、錦島、日本橋の越幸、浜町の村井、これと並んで大森の森伝は筋書なしで通る。とりわけ中でも、はなからスカシ（薄手）でうる森伝の品は、粹筋では何としてもおさえていた。それだけに知らず／＼道は狭く登りつめていたのであろう。何時か隅田川の都鳥と共に浅草海苔の名にもむらが出来た。食道楽の間での名が高まれば高まるだけに、それだけ軒も重く傾くのである。

何処の旧家にも見出される、超人的な狂い咲きの花。森伝ではそれが先代の伝兵衛であったが彼がその潮に乗って押して名をうった。当代の伝兵衛にうけ渡すころには、根が細かな商いとは言えぐんと昇りつめたすさまじい勢いである。それだけに、思えばこゝに、にっちもさっちも行かぬ極りがあったのだ。

残っている古風な諸式、細かな大福帳をかける折釘に至るまでが先代の時にびしりと型に入っていた。して見ればこの店構えも三十、いや僅々二十年一寸の昔にすぎない。それが何十年來の伝統